

Title	「こころの健康とたましいの健康」報告（2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催：臨床死生学研究講演会）
Author(s)	関，智征
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 35-35
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4958
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013年度 聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催 臨床死生学研究講演会 「こころの健康とたましいの健康」報告

2013年12月17日、聖学院大学総合研究所主催で臨床死生学研究講演会が行われた。講演者は、精神科医の石丸昌彦氏。テーマは「こころの健康とたましいの健康」で71名の参加者があった。以下は、講演内容の概略である。

石丸氏は、こころの健康について、メンタルヘルスの現状から説明した。10年前から精神疾患は我が国で最大の問題になっているにも関わらず、医療資源がメンタルヘルスに投入されていないことをデータから実証した。また、石丸氏は、社会構造の変化にも言及した。病気を受け止めるネットワークである、地域共同体、会社共同体、家族共同体が弱くなり、精神科、心療内科に行く人が増えたという。

次に、石丸氏はたましいの健康について考える上で、健康とは何かを聴衆に問いを投げかけた。そして、自身がアメリカに住んでいた時、子供の幼稚園の説明会で「子供の身体的、知的、社会的、霊的な成長を楽しんでください」と言われたエピソードを披露。人間理解の中で霊的（スピリチュアル）という次元があることがグローバル・スタンダードになっていることをWHOの動きなどからも説明した。また、自殺問題とこころの問題についても触れ、日本は自殺者の多さが外国からも憂慮されているが、霊の部分をケアしないと自殺の問題は解決されない、と展開した。

続いて石丸氏は、死生観の喪失と回復について述べた。まず、伝統的な死の意味付けと、古代から江戸時代までの神道、仏教、武士道などの死生観を紹介した。神道では、「自ずと生出て、自ずと滅ぶ」考えがある。また、映画『おくりびと』には、死は「穢れ」であるという思想が見いだされる。仏教では、釈尊の本来の教説は「死とは単に消滅すること、それ以上でもそれ以下でもない」というものであるが、後年の前世来世の思想で極楽地

獄という概念が生まれた。また、戦中の死生観として「悠久の大義に生き、死を見ること帰するが如き」のようなものがあった。そして敗戦は、伝統的な日本の死生観のアイデンティティ危機になった、という。戦後の高度成長期に、「死について考えることをやめよう。生産して経済成長をすることに集中しよう」とした結果、死生観が消滅した。その結果、戦後の日本に欠けていたものは、死生観と喪の作業である、という。

最期に石丸氏は、日本の社会にキリスト教の死生観を接ぎ木することを提唱した。キリスト教の死の概念である「罪の報酬は死である」こと、また復活の希望、すなわちビオス（肉体の命）は減びるが、ゾーエー（永遠の命）は減びないことの可能性について論じ、講演は終了した。



講演者：石丸昌彦 精神科医・放送大学教授（上段）

（文責：関 智征[せき・ともゆき] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程2年）